

2014 年 4 月 2 日

北九州市長 北 橋 健 治 殿

一般社団法人 日本建築学会九州支部
支 部 長 河 野 昭 彦

「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の

保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、北九州市八幡東区尾倉二丁目に隣接して立つ「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の取り壊しが検討されていると新聞紙上等で伺っております。また、それに対し地元住民による保存運動も行われていることもテレビのニュースや新聞等で伝え聞いております。

本会では以前より我のすぐれた建築の調査研究を行い、その成果を地域ごとにまとめ、その成果を 1986 年（昭和 61）年以来数年にわたり「総覧日本の建築」（日本建築学会編）として刊行しております。その中で本建築は価値の高い近代建築として記されており、また当該建築の設計者である村野藤吾の建築作品集において常に取り上げられていること、ご高承のことと存じます。

本建築は二つとも八幡の戦災復興事業のシンボルとして建設が計画されたもので、「八幡図書館」は 1955（昭和 30）年に竣工、「八幡市民会館」は 1958（昭和 33）年に開館したものであります。これらの建築は地元（旧八幡市）で育ち、丹下健三と並びたつ戦後日本の近代建築界を代表する建築家となった村野藤吾の九州における希有な建築作品であり、今日までほぼ半世紀にわたり地元の人々に愛着をもって使われ続けてきました。それらの建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代建築の明快な形態と機能的な空間構成を持ちながら、地域性を反映させた独自の意匠を備え、さらに北九州市の戦後の都市景観を形成しております点で優れた価値を有するものであります。とりわけ、世界遺産登録として国が進めております「近代化産業遺産群」に近隣の「八幡製鉄所施設」が含まれており、それにつながる意匠を備えた戦後日本の近代建築界を代表する作品を建築・文化資源として有効活用することが求められています。

貴下におかれましては、この二つの貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会九州支部はこれらの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2014 年 4 月 2 日

北九州市議会議長 三 原 征 彦 殿

一般社団法人 日本建築学会九州支部
支 部 長 河 野 昭 彦

「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の

保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、北九州市八幡東区尾倉二丁目に隣接して立つ「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の取り壊しが検討されていると新聞紙上等で伺っております。また、それに対し地元住民による保存運動も行われていることもテレビのニュースや新聞等で伝え聞いております。

本会では以前より我のすぐれた建築の調査研究を行い、その成果を地域ごとにまとめ、その成果を 1986 年（昭和 61）年以来数年にわたり「総覧日本の建築」（日本建築学会編）として刊行しております。その中で本建築は価値の高い近代建築として記されており、また当該建築の設計者である村野藤吾の建築作品集において常に取り上げられていること、ご高承のことと存じます。

本建築は二つとも八幡の戦災復興事業のシンボルとして建設が計画されたもので、「八幡図書館」は 1955（昭和 30）年に竣工、「八幡市民会館」は 1958（昭和 33）年に開館したものであります。これらの建築は地元（旧八幡市）で育ち、丹下健三と並びたつ戦後日本の近代建築界を代表する建築家となった村野藤吾の九州における希有な建築作品であり、今日までほぼ半世紀にわたり地元の人々に愛着をもって使われ続けてきました。それらの建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代建築の明快な形態と機能的な空間構成を持ちながら、地域性を反映させた独自の意匠を備え、さらに北九州市の戦後の都市景観を形成しております点で優れた価値を有するものであります。とりわけ、世界遺産登録として国が進めております「近代化産業遺産群」に近隣の「八幡製鉄所施設」が含まれており、それにつながる意匠を備えた戦後日本の近代建築界を代表する作品を建築・文化資源として有効活用することが求められています。

貴下におかれましては、この二つの貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会九州支部はこれらの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2014 年 4 月 2 日

北九州市教育委員会教育長 柏 木 修 殿

一般社団法人 日本建築学会九州支部
支 部 長 河 野 昭 彦

「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の

保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、北九州市八幡東区尾倉二丁目に隣接して立つ「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」の取り壊しが検討されていると新聞紙上等で伺っております。また、それに対し地元住民による保存運動も行われていることもテレビのニュースや新聞等で伝え聞いております。

本会では以前より私のすぐれた建築の調査研究を行い、その成果を地域ごとにまとめ、その成果を 1986 年（昭和 61）年以来数年にわたり「総覧日本の建築」（日本建築学会編）として刊行しております。その中で本建築は価値の高い近代建築として記されており、また当該建築の設計者である村野藤吾の建築作品集において常に取り上げられていること、ご高承のことと存じます。

本建築は二つとも八幡の戦災復興事業のシンボルとして建設が計画されたもので、「八幡図書館」は 1955（昭和 30）年に竣工、「八幡市民会館」は 1958（昭和 33）年に開館したものであります。これらの建築は地元（旧八幡市）で育ち、丹下健三と並びたつ戦後日本の近代建築界を代表する建築家となった村野藤吾の九州における希有な建築作品であり、今日までほぼ半世紀にわたり地元の人々に愛着をもって使われ続けてきました。それらの建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代建築の明快な形態と機能的な空間構成を持ちながら、地域性を反映させた独自の意匠を備え、さらに北九州市の戦後の都市景観を形成しております点で優れた価値を有するものであります。とりわけ、世界遺産登録として国が進めております「近代化産業遺産群」に近隣の「八幡製鉄所施設」が含まれており、それにつながる意匠を備えた戦後日本の近代建築界を代表する作品を建築・文化資源として有効活用することが求められています。

貴下におかれましては、この二つの貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が保存活用されつつ永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会九州支部はこれらの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

一般社団法人日本建築学会九州支部
建築歴史・意匠委員会
主査 臼 井 敬 太 郎

「北九州市立八幡図書館」と「北九州市立八幡市民会館」

についての見解

1) 建物の概要

北九州市八幡東区尾倉 2 丁目 6 番地 2 号に所在する北九州市立八幡図書館は、3 階建ての鉄筋コンクリート造で、1955（昭和 30）年に竣工。開館当時の新聞に西日本一のブック・センターと評されたように、図書保存のためでなく利用のための開架式図書館として、また九州における鉄筋コンクリート造図書館として先駆的事例であった。1 階部分にピロティと移動図書館基地を備え、2～3 階部分に閲覧室と書架を配した機能的なモダニズム建築である。設計者・村野藤吾による外観のデザインも遊び心に溢れる。大小の窓とバルコニーのリズミカルな配置、白い鉾津煉瓦（村野も勤務した八幡製鉄所において製鉄の副産物として製造された煉瓦）と黄身を帯びた特殊煉瓦の組み合わせが伸びやかな幾何学模様を描き出している。市民から待ち望まれた図書館は 1960 年には旧八幡市の人口 33 万人に対して図書館年間利用者 10 万 5 千人に達するほど利用されるほどであり、現在では開館 50 年の間に大きく育った木立ちに囲まれた市民憩いの場としても愛され続けている。同じく、北九州市八幡東区尾倉 2 丁目 6 番地 5 号に所在する北九州市立八幡市民会館は、先述の八幡図書館に隣り合う敷地に建ち、設計者は同じく村野藤吾である。地下 1 階、地上 4 階の鉄骨鉄筋コンクリート造で、音楽や演劇などに対応できる文化ホール、美術展などを行うギャラリーを備える。直前に世界最大の 50t 転炉が完成するなど八幡が大いに製鉄業で栄えた 1958（昭和 33）年に竣工した。1400 人を収容するホールで行われるコンサートや講演会、展覧会や工芸教室が定期的に開かれる総合文化施設として、現在も大事に使われている。内部はエントランスからホールへと導く開放感に溢れた左右対称の吹き抜けとなった階段空間が大きな特徴で、経済性を重んじる現代では実現しづらい清々しい空間である。そして滑らかな曲線を描く流麗な意匠の手摺、ピアノ鍵盤を模した採光窓など、細かな手仕事の魅力も尽きない。外観は、ホールを内包する大きなボリュームを感じさせない工夫が凝らされている。ホールを包み込む巨大な壁面を軽快に見せるために、大きく湾曲させたり、ガラス張りのホワイエと差掛け屋根で挟み込んだりと、都市計画の核として建築の見え方を考え抜いた建築家の配慮が漲っている。

2) 歴史的価値

戦前から国内有数の工業都市であった八幡は空襲目標となり、1945（昭和 20）年の空襲

で市街地の6割が焼け野原になった。戦後、特別都市計画法に基づき、八幡駅を起点に幅員50m、総延長300mの直線道路が北九州のランドマークである皿倉山麓に向かって計画された。この復興都市計画の焦点になる建築として、直線道路の終点に八幡図書館と八幡市民会館は設計された。都市という文脈においても、北九州市の戦後史を語る二つの建築であり、戦災復興として、産業だけでなく文化にも情熱を注いできた市史の象徴としても「八幡図書館」と「八幡市民会館」の存在は貴重である。

二つの建物の設計者である建築家・村野藤吾は、佐賀県唐津市出身で旧八幡（現北九州）市に育ち、旧八幡製鉄所に勤務するなど郷土にも関わりが深く、小倉市民会館（現存せず）や八幡平和ビル（現存せず）の設計も手がけている。村野は、既存の様式にとらわれず土地の歴史や文化を巧みに建築作品に織り込んだ珠玉の作品を作り続けた建築家である。代表作の一つ「広島世界平和記念聖堂（1954年）」は、丹下健三設計の「広島平和記念資料館（1955年）」とともに戦後建築として初の重要文化財に指定されている。「八幡図書館（1955年）」と第1回建築協会賞受賞した「八幡市民会館（1958年）」は、村野が建築家として円熟期に迎えた時期の作品であり、また、同じ設計者による異なる用途の建物が並び立つ事例としても希有である。

市街地を眼下に収める「八幡市民会館」のホワイエより北側の八幡駅方面を望むと、「八幡市図書館」、同じく村野設計の「福岡ひびき信用金庫本店（1971年）」が一望できる。それは、同じ建築家による作品群が計画的な都市軸に沿って連続的に展開される国内でも類希な都市景観である。それぞれの建物は、図書館、銀行、市民会館と全く用途が異なり、竣工年もまちまちでありながら、ある種の景観的統一感が生まれているのは、一人の建築家が地域に根ざした設計を行い、それも長い時間的スパンを見越して計画を進めてきたからに他ならない。もっとも、日本を代表する建築家が作り出した都市スケールとしての美学として価値があるだけでなく、第二次世界大戦以降の北九州市が辿って来た輝かしい都市再生を語る姿としても極めて優れているのである。

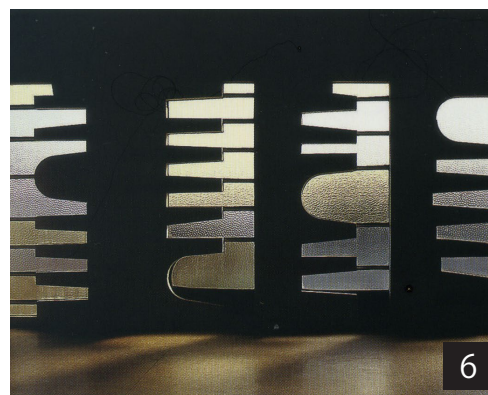
八幡は、明治・大正期の建物を保存活用している事例も豊富である。世界遺産登録を目指す「八幡製鉄所施設（1901年～）」や東京駅を設計した辰野金吾設計の「旧百三銀行支店（1915年）」などである。これに昭和を代表する建物として、村野の建築群を加えた地域振興構想も練られている。明治から昭和にかけての豊穡な建築遺産を生かすユニークな町おこしは、着地型観光にも寄与するだろう。そして、豊かな文化的ストックとして村野の建築群を生かすことができれば、環境未来都市として北九州市はさらなる注目を集めるものと考ええる。

以上のように、1）八幡図書館と八幡市民会館は戦災から立ち上がった市史の象徴であり、2）日本を代表する建築家・村野藤吾の設計した建築であり、3）建築そのものの意匠も優れており、4）それは都市景観レベルで見ても希有であり、5）北九州の観光・文化ストックとしても期待される。以上の理由から、八幡図書館と八幡市民会館は建築的価値を今でも有しており、今後も二つの建築の保存と活用が望まれると判断する。



北九州市立八幡図書館

- 1 北側正面ファサード
- 2 南側ファサードと相対する北九州市立八幡市民会館
- 3 南側ファサードのディテール



北九州市立八幡市民会館

- 4 北側正面 1 階へのアプローチ
- 5 吹き抜けの階段空間
- 6 鍵盤を模した採光窓

1 ~ 5 白井敬太郎 撮影（2014 年 2 月）
 6 『村野藤吾のデザイン・エッセンス』（和風建築社、2001 年）